

NHK 水戸放送局と協力して大学生の映像作品を放送する試み

村野井均*・岩佐淳一**

(2006年11月30日受理)

A Trial to Broadcast Picture Works of a University Student in Cooperation with NHK Mito Broadcasting Station

Hitoshi MURANOI* and Jyunichi IWASA**

(Received November 30, 2006)

はじめに

小・中学校の国語の教科書に「ニュース番組を作ろう」が入り，小・中学生が番組を作り，テレビ局やCATVから放送するようになってきている（福井大学,2005）。メディア・リテラシー教育である。すでに制作し放送した経験のある学生が，大学に入学する時代になっている。小・中学校の教育の変化は，大学教育にすぐに取り入れられた。メディア・リテラシー能力が児童・生徒だけでなく，大学生や市民にも必要な力なのであるから当然といえる。

大学では，基礎教育で育てられた力を基に，学生の調査，主張，発信能力を発展させている。茨城県では茨城大学，筑波大学，東京芸術大学の学生が番組を制作し，NHK水戸放送局から「わいわいデジタル便り」として月3回放送している。地元のケーブルテレビ局からの放送は，中央大学や白鷗大学，愛知淑徳大学などが行っている。東京情報大学は毎週番組を制作しており，地域情報の担い手となっている。インターネット放送は，慶応大学，群馬大学，中京大学，金城学院大学などが行っている。老舗の東京工科大学にいたっては番組を毎日制作し，放送している。小・中学校で育てた力は，大学に進んでより具体的で，実践的なものとして発展しているのである（村野井,2006）。

今後，多メディア・多チャンネル化が進み，地域情報の発信や自己表現，自己主張がもっと可能

*茨城大学教育学部学校教育（〒310-8512 水戸市文京 2-1-1；Course for School Teachers, College of Education, Ibaraki University, Mito 310-8512 Japan）

**茨城大学教育学部情報文化課程（〒310-8512 水戸市文京 2-1-1；Course for Information and Culture, College of Education, Ibaraki University, Mito 310-8512 Japan）

***この論文は，科学研究補助金基盤研究（C）「放送局と学校が協力して児童・生徒の映像作品を放送する試みに関する研究」（研究代表：村野井均）および基盤研究（B）「初等教育におけるメディア・リテラシー教育用リソース及びリソースガイドの開発」（研究代表：三宅正太郎）の補助を受けている。

になってゆく(笠松ら, 2004)。メディア・リテラシー教育は, 社会においてますます必要とされていくといえる。茨城大学の取組は, 大学と地方放送局が提携して取り組んでいる点で特色があり, 他大学のモデルとなりうるものであるので, ここに紹介する。

2 「NHK 茨城県域デジタルテレビ放送」に対応する茨城大学タスクフォース企画会議の経過

茨城大学は, 2004年10月から放送が開始された「NHK 茨城県域デジタルテレビ放送」に対応すべく8月27日にタスクフォースを設置した。

このタスクフォースは, 2004年4月の茨城大学改革推進委員会で, 宮田学長から本学が新たな広報活動戦略の一環として, NHK 県域デジタルテレビ放送に協力するとともに, 本学の教育研究活動等の情報を番組内容として積極的に提供することを目的に教職員と学生からなる組織として設立することについて提唱され, 設立されたものである。タスクフォースは, 当初, 田切理事・副学長(学術担当)を筆頭にPR委員会委員長の図書館長をはじめ, これまで学内で広報活動の実績がある「放送研究会」, 「学生新聞部」, 「C-Mail 編集部」, 「ニューズレター: 大きな百合の木の下で」の学生及び教員等を中心とする構成員であったが, 学部組織から教員と学生各1名, 総務課, 学務課などから16名を推薦してもらい, 全学展開となった。発足会までの間, 本学タスクフォースとNHK 水戸放送局の福島企画総務副部長, 富岡チーフディレクター, 小田切番組制作アナウンサーとで, 「NHK 茨城県域デジタルテレビ放送」とは何か, 大学からどういう情報を提供するかなどについて情報交換を行ってきた。発足会には担当になるNHK 水戸放送局の向井記者にも出席し, 田切理事から本学タスクフォースの設立経緯と今後の方向性について説明があり, 向井記者からはNHK 県域デジタルテレビ放送は毎週月～金の午前11時から12時までと午後5時から7時までの2時間30分放送され, 県内の主婦向け情報や旬の話題・ニュースなどを放送すること。企画番組として週1回程度, 県内の各大学が作成する「ビデオレター」(6~7分)のコーナーを設けること。学生ならではの視点で企画しビデオ撮影したものをオープンスタジオで小田切アナウンサー(当時)を交えて生放送でやり取りすることなどの説明があり, 意見交換が行われた。第1回目の企画会議を9月17日(金)に開催し, 10月から12月までの本学のイベント情報の収集とNHKへ提供, 企画映像選定などをまとめることで閉会となった。その後, 月に一回「NHK 茨城県域デジタルテレビ放送」対応茨城大学タスクフォース企画会議(以下, タスクフォースと略)が, 2006年11月までに23回開催されている。

3 「わいわいデジタル便り」のシステム

タスクフォースは, 月1回開催され, 学生団体, 教員, 事務職員が参加している。会議では, (1) 放送された作品を鑑賞し, コメントする。(2) 提供できる情報の確認(単発, 通年および多年), (3) 情報の収集方法, (4) 提供の方法, (5) 提供の頻度, (6) 企画物の可能性, (7) 必要な施設・設備, (8) 施設・設備以外の必要経費の概略について議論している。

企画は学生，教員から出されるが，事務職員も大学情報を提供し企画化できるものは映像作品化を試みている。

映像作品は，毎週木曜の18時35分から，NHK水戸放送局公開スタジオ「わいわいデジタル便り」のコーナーで，茨城大学や筑波大学，東京芸術大学取手キャンパスの学生が制作した映像作品が紹介され，併せて，企画・撮影にあたった学生たちが司会者とトークを行っている。

4 これまでの成果

(1) 定期的に放送しているもの－「わいわいデジタル便り」

「わいわいデジタル便り」は，月3回の定時枠で，茨城大学と筑波大学と東京芸術大学が各1回放送している。2004年10月からこれまでの，茨城大学学生の映像作品及び企画・編集者は次のとおりである。学生の氏名は一部略している。

2004年10月14日（木）・・・さいふる☆すたいる

マレーシアの留学生である工学部機械工学科3年生のサイフルくんの1日の生活をレポートしたものである（制作 人文学部3年生）

2004年11月11日（木）・・・工学部の研究をわかりやすく伝えよう！ 人間情報工学研究室の紹介（制作 理工学研究科2年）

工学部の人間情報工学研究室の研究内容を，映画マトリックスをイメージした映像で紹介した。また，スタジオでノートパソコンを用いて研究内容のゲームをアナウンサーに体験してもらった。

2004年12月9日（木）・・・手で描く映画の世界－茨城たった一人の看板絵師・木下武夫さん－（制作 人文学部3年）

水戸駅前の水戸東映映画館の広告看板を手書きで書いている看板絵師の作業風景の紹介とインタビュー。

2005年1月13日（木）・・・茨城大学放送研究会の活動の紹介（制作 人文学部1年生）

主に茨城大学学園祭「茨苑祭」で活躍している放送研究会の活動を紹介し，学び舎としての大学だけでなく，楽しい大学をダンスを取り入れて積極的にアピールした。

2005年2月10日（木）・・・担ぎ屋の男達－祭りというコミュニケーション－（制作 人文学部2年生）

現代の祭りは地元の人だけではすでに成り立たない。遠方から来る担ぎ屋たちに支えられて，ころうじて成立している。新しい祭りの姿を紹介した。

2005年3月10日（木）・・・茨城大学の授業について（制作 教育学部4年生）

茨城大学で展開されている研究や講義の一端を多くの高校生に知ってもらうために、学生が各学部の授業紹介と担当教員へのインタビューを行い撮影した。スタジオで抜粋した映像を紹介した。

2005年4月7日(木)・・・茨城大学自主映画制作の会の活動紹介(制作 工学部3年生)

茨城大学自主映画制作の会(JEK)では、デジタルビデオカメラなどを使って自主映画を制作、上映している。JEKの活動を知ってもらうため、JEKの短い作品を紹介した。

- ・ 手紙(制作 学生A) ・ モンスターシアター(制作 学生T,T)の2作品。

2005年5月12日(木)・・・茨城大学教育学部「梅が丘小：英会話ボランティア」の活動紹介(制作 教育学部4年生)

水戸市の公立幼稚園、小学校、中学校が英会話特区になり、英語教育が積極的に行われ始めていること。その中で、茨城大学教育学部の英語教師を目指している学生たちが、ボランティアで小学校に入り、授業の手伝いをし、子どもたちが英語を話す機会を増やす仕事をしていることを紹介した。

2005年6月9日(木)・・・茨城大学放送研究会：学園ドラマ「君がいた季節」の紹介(制作 教育学部3年生)

今回、大学生の日常を短編ドラマにした。ドラマ性を持たせるため、最近流行の純愛(「冬のソナタ」など)で悲恋の物語にした。脚本および出演者などを大学生がすべて行うことでリアリティのあるドラマを目指した。

2005年7月7日(木)・・・茨城大学大学院友田研究室：たたら製鉄を再現(制作 理工学研究科2年)

古代から伝わる製鉄方法である「たたら製鉄」の再現を行った。この方法は、古くは古墳時代から伝わる製鉄法で、炭を燃やしてその熱で砂鉄を溶かして、鉄の塊を作り出すという方法である。実際に溶けている鉄など操業の映像を見もらうことで「ものを作り出す」という楽しさと興味を持つきっかけになればと思い、紹介した。

2005年8月4日(木)・・・子どもたちと一緒に美術館～造形ワークショップ活動を通して(制作 教育学研究科2年)

茨城大学では、6年前から茨城県近代美術館とのインターンシップ授業を実施してきた。夏休み中に2週間開催される、美術館の事業「子どものための美術館ワークショップ」の企画運営に、茨城大学の学生たちが携わる授業である。授業名は「総合演習M」「美術館ワークショップ」で、この授業に参加するのは美術専科に限らず、子どもたちと一緒に活動することに興味のある学生たちです。今年は50人近くが集まり、美術館と夏を盛り上げている。

2005年9月8日(木)・・・茨城大学ビデオ制作班：原子力事故防災マニュアル(ビデオ)(制作 理学部4年生)

茨城大学ビデオ制作班では、1999年9月30日に東海村で発生した原子力事故を教訓にして、もし原子力事故が発生した場合にどのような行動を取ったらいいか、学生の視点で2003年5月に映像化した。

ビデオは、1. 建物の中、2. 屋外、3. 家の中、4. 車の中の4つのシーンを想定して制作されている。臨界事故から6年が経過しようとしており、あの当時の混乱も、地域の人々から記憶が薄れつつある時期かと思う。もう1度あの時に立ち返って、どういった行動を取ればいいのか再度確認しておこうと思い制作した。

2005年10月6日(木)・・・第15回茨城大学－韓国忠北大学校交流事業

(制作 訪韓団長：理工学研究科高妻教授)

茨城大学では、15年前の1991年から、韓国の忠北大学校と学生の相互交流事業を行ってきた。今回は、8月に行われた韓国での研修の様相を紹介した。忠北大学校本部前での記念撮影、アンドンにおけるリュウ一族の村(貴族階級＝ヤンバン)、スウェダンにおいて約400年前の朝鮮時代の貴族階級の家に宿泊して伝統的な民族文化を体験した。

2005年11月10日(木)・・・Formula-SAEをみんなに知ってもらおう！

(制作 理工学研究科2年生)

Formula-SAEとは「ものづくりによる実践的な学生教育プログラム」として1981年にアメリカで始まった。内容はフォーミュラスタイルの小型レーシングカーを学生がチームを組んで企画・設計・製作したものを持ち寄り、車の走行性能だけでなく、車両コンセプト・設計・コスト審査など、ものづくりの総合力を競う大会となっている。

今年開催された第3回大会に茨城大学が県内で初めて参戦した。今回はこの大会へ向けた車作りと大会の様子を写真や動画を交えて紹介し、スタジオに実車を持ち込んで見せた。

2005年12月8日(木) エコノパワーへの取り組みを知ってもらおう！(制作 工学部4年生)

エコノパワー燃費競技会という1リットルのガソリンでどこまで走れるかを競う大会に参加した様子を紹介した。車両は50ccバイクのエンジンを使用し、規定走行距離を規定時間内に走行して、走行前と走行後の燃料の重量を計測、その重量差から消費量を計算し、最も消費量が少ないチームが優勝するという競技である。この大会へ向けた車作りと大会の様子を写真や動画を交えて紹介した。スタジオには実車を持ち込んだ。

2006年1月12日(木)・・・茨城大学を一般の人が利用できることをアピール

(制作 教育学部3年生)

大学というものは、その大学に所属している学生しか使用できないという先入観をもたれがちである。また、学生ばかりでなかなか大学内に入ろうとするにも、何か入りたがる雰囲気を大学自体が出していると捉えられがちだと思われる。しかし、実際は大学内でもさまざまな場所が市民も使えるのであるが、それを認知している人はまだまだ少ない。そういったものを払拭するためにも、市民が茨城大学のこういったところを利用できるのか紹介した。

2006年2月9日(木)・・・茨城発見第一弾! 木葉下町の三つの謎 (制作 人文学部3年生)

茨城県には変わった地名が多い。「潮来」、「瓜連」、「大足」、「全隈」など。ある日学生が地図を見ていると水戸市西部に不思議な地名「木葉下」を発見!!この地名はなんて読むのだろうか。また、この地名の由来はなんだろうか。

この地名に興味を持った学生3名が、この地名に造詣の深い大人たちを訪れ、様々な説を調べ、考える。また、そのなかで様々な説の背景にある歴史や調べている人たちの浪漫を知っていく。私たちの身近にある地名の由来を探索し、想像する楽しさを伝えた。

2006年3月9日(木)・・・① ホワイト・デー大作戦 & ②うら谷津再生プロジェクト

(制作 ① 放送研究会: 人文学部2年生) および (制作 ② 農学部4年生)

①バレンタインデーのお返しに毎年何をあげようか悩んでいる男性は多いと思われる。そこで、人文学部社会科学科学生は水戸市内で、高校生、大学生、主婦にインタビューをして年代別に結果をまとめて報告した。

②農学部のある阿見町の耕作放棄地再生に取り組むボランティアグループ『うら谷津サークル』の活動紹介。《うら谷津》は、約4haの谷津田と10haの山林がある場所で、そこを地元住民の方々は《うら谷津》と呼んでいる。ここの耕作放棄はすでに約30年に及んでおり、学生と教職員が《うら谷津》のある地元上長地区の農家の呼びかけに応え、地元農家や市民と一緒に再生耕作放棄地の再生活動に取り組み始めたのがちょうど2年前のことである。この耕作放棄地での自給菜園の取り組みを地元市民の人々にも広げていこうとする取組みを紹介した。

2006年4月6日(木)・・・茨城大学自主映画制作の会の活動紹介 (制作 教育学部2年生)

・君と夏影(K君制作)を紹介した。

2006年6月1日(木)・・・茨城大学教育学部情報文化課程: プロジェクト科目、映像工房プロジェクトの活動紹介

「ストップモーションアニメ: しりとり遊び」(制作 教育学部4年生)

情報文化課程独自の授業科目として、「プロジェクト科目」がある。1年から3年まで必修となっている異学年の集団による授業である。「集団による活動」「具体的なテーマ設定」「成果の発表」という基本方針に基づきながら一つの目標(今回の目標はアニメーションの制作)のもとに組織を作り、学習・研究活動を行っていることを紹介した。

2006年7月6日(木)・・・茨城大学漕艇部の活動紹介 (制作 理学部4年生)

8月に行われる全日本大学選手権の男子クォドルプル(M4X)に出漕するクルーを紹介した。目標を持ち、その達成のため全力を尽くす。体育会という凝り固まった価値観の中で失うものもある。しかし、それ以上に本気で目指すからこそ得られるものもたくさんあると思う。たったひとつの証を手に入れるために練習を重ね、その先でどんな自分と出会えるだろうか。どんな自分に出会いたいだろうか。茨城大学漕艇部として過ごしてきた日々の中で何を感じ、どんな姿で卒業を迎えたい

と思っているかを表現した。

以上、21回にわたって映像作品や活動を紹介している。その後8月31日、10月26日にも放送しているので11月末段階で23回放送している。

(2) 臨時に集中的に放送するもの－「熱風スタジアム」

NHK 水戸放送局のデジタル放送には、公開スタジオにおいて視聴者参加型で行われる「熱風スタジアム」というコーナーがある。ここには、NHK 水戸放送局から依頼されて、期間限定で集中的に茨城大学の紹介をする場合がある。

2006年1月10日（火）から1月20日（金）の18時45分から、NHK 水戸放送局公開スタジオで「熱風スタジアム」のコーナーに、茨城大学学生9サークルが出演した。依頼があつて放送したのは以下である。

- ① 2006年1月10日（火）・・・Impressive Voice の活動紹介
スタジオでアカペラの「キューティーハニー」を歌った。学生7人が出演した。総合司会は放送研究会の学生1名が行った。
- ② 2006年1月11日（水）・・・邦楽研究会の活動紹介
スタジオで「残光の彼方へ」を演奏した。邦楽研究会（学生9名）と応援の人たちが参加した。総合司会は放送研究会の学生2名が行った。
- ③ 2006年1月12日（木）・・・ストリートダンスサークル踊り屋の活動紹介
スタジオでポップメインの「フリースタイルショーケース」を踊った。『踊り屋』（学生4名）と応援の学生たち、デジタル便りの学生4名が出演。総合司会は放送研究会の学生1名が担当した。
- ④ 2006年1月13日（金）・・・落語研究会の活動紹介
スタジオで「大喜利」を披露した。落語研究会から6名が参加し、総合司会は放送研究会の2名が担当した。
- ⑤ 2006年1月16日（月）・・・大道芸サークル「スウェット組合」の活動紹介
スタジオで「フラワースティック」と「カードマジック」を披露した。「スウェット組合」の学生3名が演じ、総合司会は放送研究会の2名が行った。
- ⑥ 2006年1月17日（火）・・・ハンドボール部の活動紹介
スタジオでハンドボール部の19人が出演し、練習風景や監督のVTRを流して活動紹介した。総合司会は放送研究会の学生2名が担当した。
- ⑦ 2006年1月18日（水）・・・Jazz 研究会の活動紹介
スタジオで「Mr. P. C」を演奏した。Jazz 研究会の学生5名が参加した。総合司会は放送研究会の学生2名が行った。
- ⑧ 2006年1月19日（木）・・・中南米音楽研究会の活動紹介
スタジオで「コーヒールンバ」を演奏した。中南米音楽研究会の学生7名が参加した。総合司会は放送研究会の学生1名が行った。
- ⑨ 2006年1月20日（金）・・・漕艇部の活動紹介

スタジオでバーベルによる筋トレ「ハイプル」、「エルゴ」によるトレーニングを実演した。漕艇部の学生12名が参加した。総合司会は放送研究会の学生2名が行った。

また、2006年7月18日（火）から7月28日（金）の18時45分から、NHK水戸放送局公開スタジオで「熱風スタジアム」のコーナーに、茨城大学の9研究室が出演した。

2006年7月18日（火）・・・人文学部人文学科日本考古学研究室（茂木雅博教授）の紹介
日本考古学研究室には現在、学部生10人、院生2人が所属している。

去年8月に1ヶ月間東海村にある真崎古墳群の1号墳と5号墳の発掘調査をした。その時に出土した遺物の整理作業から報告書を製作するまでの流れと、その他屋外で実施する様々なフィールドワークの一例として、奈良県大峯山での山伏修行体験について紹介した。

また、これまでにまとめた9冊の報告書から、常陸日天月天塚古墳と中国皇帝陵の測量調査について紹介した。

2006年7月19日（水）・・・大学院理工学研究科応用粒子線科学専攻
中性子材料科学講座友田研究室（友田陽教授）の紹介

友田研究室には現在、学部生4人、修士の大学院生9人、博士の大学院生10人の計23人が所属している。留学生や海外からの研究員が多くまた、国内外の学会にも積極的に参加する国際色豊かな研究室である。

研究室のテーマ「中性子ナノ構造解析によるエコマテリアル開発」のキーワードは「量子ビーム組織・構造解析技術」、「環境調和型材料開発」と「材質予測技術と信頼性評価」である。マイクロ組織と各種特性の関係の解明が主たる内容になるが、中性子ビームの利用、工業材料のマテリアルフローの把握、それに基づきリサイクル性を考慮した高機能材料の開発等に注力している点が他研究室と異なる特徴である。研究室メンバーは各自が「やりたいこと」を主張し、研究室で実施可能な課題について研究を進めている。

6月3日に行われた「こうがく祭」での「たたら製鉄」の模様をVTRと「ケラ」で紹介した。

2006年7月20日（木）・・・理学部理学科生物科学コース
田内研究室（田内広教授）の紹介

田内研究室では、放射線などで起きる遺伝子の損傷を、細胞の中で直す仕組みや、がんが発症する仕組みを研究している。4年生6人、修士の大学院生7人、博士の大学院生2人の計15人が分子生物学の実験や研究に取り組んでいる。優しいけれどちょっと厳しい？ 田内先生の指導のもとで、主にヒトやニワトリの培養細胞（動物から取り出した細胞を培養したもの）を使って遺伝子の変化やタンパク質の役割を調べている。

スタジオでは、これらの研究内容について、DNA析出（可視化）の実演や、遺伝子損傷・修復活動・突然変異の可視化など写真パネルで紹介した。

2006年7月21日（金）・・・工学部機械工学科増澤研究室（増澤徹教授）の紹介

増澤研究室では、工学技術の医療分野への展開のための研究を行っている。具体的には人工心臓の開発や、超音波メスの研究などである。そんな数ある研究内容の中から、人工心臓について紹介した。スタジオでは、磁気浮上型人工心臓について、実機とVTRで紹介した。

2006年7月24日(月)・・・理学部理学科化学コース

折山研究室(折山剛教授)の紹介

折山研究室では、有機合成化学に関する研究をしている。研究室メンバーは、先生を含めて12名で、そのうち留学生が3名(中国人2名、韓国人1名)いる国際的な研究室である。学生達は一日の半分以上を研究室で過ごしている。「知力より体力!」。でも、常に考えながら研究することがとても重要で、世界と競争しながら、ナンバー1をめざして研究を行っている。

スタジオでは、これらの研究内容について、VTRや写真パネルで紹介した。

2006年7月25日(火)・・・教育学部情報文化課程広報プロジェクトの紹介

島田研究室(島田裕之教授)、岩佐研究室(岩佐淳一助教授)、林研究室(林延哉助教授)

情報文化課程広報プロジェクトは、作られて8年目のユニークな授業で、専門科目でも教養科目でもない授業形態をとっている。1-4年生が共同で行う授業で、チームワークで授業を学生自ら創ることがポイントとなっている。様々なプロジェクト科目の中の一つとして位置づけられている。このプロジェクトは、情報文化課程を広報する→そのことを通じて文章力/企画力/マネージメント能力/交渉力を養うことが目的である。

スタジオでは、これらの授業内容について、VTRと情報雑誌『いんふおかるちゃー』で紹介した。

2006年7月2日(水)・・・大学院教育学研究科学校臨床心理専攻の紹介

学校臨床心理専攻では、スクールカウンセラーをはじめ、学校に関する領域を中心に様々な臨床現場で活躍できる心理臨床の実践家を目指して学んでいる。特徴としては、社会人学生、小中高の現職教員学生、学部から直接進学してきた学生が、同じ院生として、お互い情報交換しながら刺激しあっているという点が上げられる。修士生には、資格を取り臨床心理士としてスクールカウンセラーや児童養護施設等で活躍している人もいるし、現職教員として大学院で学んだ臨床心理学の知見を学校現場で活用している人もいる。

スタジオでは、これらの授業内容について、学生(修士1年生)手作りのVTRと大学院教育学研究科のパフレット「もっと識りたい人の大学院を歩く本」を使って紹介した。

2006年7月27日(木)・・・農学部資源生物科学科

環境毒性化学研究室(太田寛行教授)の紹介

太田研究室では、微生物生態学という学問分野を通して地球環境の保全を考えていこうとしている。1gの土にはおよそ10億もの微生物が棲息しており、研究室ではこの微生物の力をかりて様々な研究を行っている。

スタジオでは、これらの研究のうち、ノニルフェノール分解菌、畑地での微生物による亜酸化窒

素ガス発生について、三宅島火山灰の微生物などについて、写真パネルで紹介した。

2006年7月28日（金）・・・人文学部社会科学科内田研究室（内田聡助教授）の紹介

内田研究室（金融論ゼミナール）には現在、学部生17人が所属している。

皆さんは「金融」というと、お金儲けの学問だと思われるが、本来、金融は社会に不可欠なものであり、学生たちはその仕組みや活動を日々勉強している。

しかし、それにとどまらず、ゼミ活動の最大の目標は、将来「社会に出て、自分がやりたいことを実現する力」を身につけることで、いつも学生が主体的に活動している。

11月に開催される「働く意義、学ぶ意義」の講義とシンポジウムについて紹介した。

以上のように、9サークルの活動と9研究室の研究紹介が行われた。単発の企画では、サークル紹介をNHK水戸放送局へいつでも申し込めるようになり、学生サークルが公演や発表会を県民に知らせ、参加者を増やす効果が期待されている。

5 今後の課題

以上のように、2004年10月のから2006年11月までの2年間に、定期の「わいわいデジタル便り」で23回、集中の「熱風スタジアム」で18回、合計41回放送されている。大学の番組制作力の高さを示すといえる。大学には若者がたくさんおり、特に茨城大学は全国から学生が集まっている。小・中学校で教わった番組作りの力を伸ばすのは、大学の使命といえる。また、研究者は先端の研究を行っており、研究を紹介したいという気持ちは強い。映像作品化への潜在的な要求は強いといえる。

課題は3つ考えられる。1つは大学内での宣伝不足である。地上波デジタル放送を見ることができる体制が整っていないため、タスクフォースの活動や番組作りができることが学生、研究者に知られていない。視聴体制の整備や録画視聴の体制整備が求められる。2つ目は予算である。学生は手弁当で映像作品を作っている。大学は機材の貸し出しを行っているが、消耗品や交通費などは学生の負担になっている。賞を設けるなどして奨励する必要がある。3つ目は、効果測定である。CATV局は、大学と協力して住民が制作した番組を市民に評価してもらっている（笠松ら、2004）。

学校は子どもが作った番組を保護者に見てもらい、学校への評価が変化するか調査している。大学も放送作品に対する視聴者による評価を行っておくべきである。具体的には、地域の人が番組を見ているかどうか、番組をどう評価しているかである。学生や市民が映像作品を作り、放送するのは日本では比較的新しい文化である。地域に根づくためには、住民の支持がかかせないのである。

引用文献

- 笠松寿史・村野井均. 2004. 「住民地域に与える影響と住民による評価」 『日本教育工学会第20回全国大会発表論文集』 389-390
- 福井大学教育地域科学部附属教育実践総合センター・福井県視聴覚教育研究会・福井県教育工学研究会・NHK福井放送局. 2005. 『みんなテレビディレクター - 「発信！マイスクール」放送100校記念報告書 - 』福井大学教育地域科学部附属教育実践総合センター
- 村野井均. 2006. 「メディア・リテラシーへの期待」『新しい教育課題と社会科の役割』 東書教育シリーズ 中学校社会科用 東京書籍, 40-43.

謝辞：この論文は、茨城大学学術企画部企画課田中裕二係長が記録したタスクフォース成立過程の記録や作品リストに基づいて書かせていただいた。放送は、放送してしまえば消えてしまい、記録をとることが難しい。特にスタート当初の記録は、企画がうまく行くか行かないかわからない状態のため、記録が残りにくい。田中係長の記録は丹念であり、また貴重なものである。また、タスクフォースは田切理事・副学長以下、多くの事務職員に支えられている。富岡チーフディレクターを始めとするNHK水戸放送局の方々のオープンな姿勢と学生活動や映像作品への適切なコメントも参加意欲を高めている。そしてタスクフォースが続けられるのは、ユニークな作品を作り、高い能力を発揮する学生諸君のおかげである。記して感謝の意を表したい。